

HPVワクチンの普及を

がん社会 を診る

中川 恵一

子宮頸(けい)がんは感染型のがんの代表で、発症原因のほぼ100%が性交渉に伴うヒトパピローウイルス(HPV)の感染です。性行動が活発な時期のウイルス感染が、30〜40代に発症のピークをもたらします。

HPVはごくありふれたウイルスで、日本女性の約8割が感染経歴を持ちます。しかしながら発がんに至るのは感染者の0.1%程度にすぎず、ウイルス感染がなければ子宮頸がんを発症することはまず

ありません。このため性交渉を始める前にHPVに対するワクチンを接種することで、発がんの予防が可能です。

スウェーデンの調査研究の結果、17歳未満で接種することで、子宮頸がんの発症が1割程度に低下することが分かっています。日本でも2013年4月から、小学校6年生〜高校1年生の女子を対象に法定接種が導入されています。

ところが接種後の症状が大

きな社会問題となり、国は9年間にわたり「積極的勧奨」を差し控えました。自治体から対象年齢の女子への接種案内が出されなくなり、一時は8割近かった接種率がほぼゼロになりました。

その後、ワクチン接種の有効性を示すデータが続々と公表され、ワクチンと接種後症状との関連も否定的とされたことから、22年4月に積極的勧奨が再開されました。加えて、厚生労働省は積極的勧奨を中止した9年間に接種機会を逃した世代に対し、無料の「キャッチアップ接種」を実施しました。

厚生省の資料によると、「キャッチアップ」世代の初回接種率は24年9月末時点で約40%まで上昇しました。同年度末にはおよそ50%に達したと推計されています。一時はほぼゼロに落ち込んだこの世代

の接種率が、ここまで回復したことは感慨ひとしおです。世界保健機関(WHO)は子宮頸がん撲滅に向けて15歳以下の女子の90%の接種率を目標に掲げています。「定期接種」世代の初回接種率は、キャッチアップ世代と同水準で約50%です。改善したとはいえ、日本の現状は決して満足できるものではありません。

男性向けの定期接種も遅れています。HPVはそもそも、性交渉によって男女間で感染します。オーラルセックスによって、性を問わず、HPVによる中咽頭がんも増えています。

諸外国と同様に、東京都の多くの区や市では男性も無料で接種を受けられます。今後は国レベルでの対応が求められるでしょう。ワクチン接種とともに検診の受診率が向上すれば、女性の敵である子宮頸がんの撲滅も視野に入ってくると思います。

(東京大学特任教授)



イラスト 中村 久美